非日常を日常に

「懐かしくて新しいアクティブフリル浴衣」

浴衣のままでは毎日着られない。
でも裾をフリルにしたら
気軽な部屋着として
毎日着られるかもしれない。
そんな思いから
アクティブフリル浴衣は
生まれました。

箪笥に眠っている一枚の浴衣の活用から、日本の伝統文化着物について考えてみませんか。

「浴衣=祭り」「浴衣＝温泉」「浴衣＝旅館」以外にも、あらゆるシーンで活躍しそうな浴衣の可能性。

浴衣をユニバーサル＆バリアフリーなエコロジーウエアに変えると…

アクティブフリル浴衣の活用例（多用途、多目的浴衣、多機能）

・小さなお子様からご年配の方まで、誰でも簡単に自分で着られます。

・浴衣に不慣れな外国人向けのインバウンド向け浴衣にも最適です。

・洋服の上に羽織れるので、家庭、職場、施設などでエプロン、作業着として。

・体の不自由な方にも安心安全なバリアフリー仕様です。

・介護衣料として着脱がしやすいので、院内着、館内着として便利です。

・アクティブフリル浴衣　＋　機能性（テクノロジー）＝　健康衣料（多機能）

【　一枚の浴衣から描く伝統文化の未来　】

伝統文化　×　ユニバーサルデザイン　＝　未来産業

Style　A　（浴衣袖　＋　裾フリル）

◎　イベント　　（気軽な浴衣としてお祭りや、イベントの法被がわりに）

◎　ユニバーサル（インバウンド向け浴衣、新しい観光ファッションに）

Style　B　（袖なし　＋　裾フリル）　　Style　C　（長袖　＋　裾フリル）

◎　バリアフリー（医療、介護、老人施設の院内着として）

◎　カジュアル　（Tシャツや、ジーンズと合わせて気楽な外出着に）

◎　エコロジー　（ルームウェア、旅行、お泊りの寝間着として）

◎　クールビズ　（官公庁、企業、学校、保育園、幼稚園、施設などの館内着）

◎　カルチャー　（料理教室のエプロンに、茶道、華道のお稽古着、備前焼の作業着などに）

（用途に合わせてデザインを柔軟にアレンジできます。あなたの一枚を作ってみませんか。）

アクティブフリル浴衣プロジェクト　２０１８

伝統文化を未来産業へ

失われてからではなく、いま守らなければならない大切な伝統産業や文化があります。

　日本の民族衣装の着物や浴衣を次世代に残し、伝えてゆく新たな取り組みとして「アクティブフリル浴衣」を開発しました。

バリアフリーでユニバーサル!

　アクティブフリル浴衣を作り着ることを通じて、幅広いみなさまの仕事づくりや事業展開につなげます。コスチュームデザイナー田中朋子とＮＰＯ法人社会就労センター協議会は、

①障がい者を含めたあらゆる人の働きがいのある人間らしい仕事の開発と雇用の促進。

②循環型社会の実現に向けたイノベーションの推進。

ＳＤＧｓの考え方を基本理念として、事業を展開していきます。

アクティブフリル浴衣プロジェクト 2018 は、「非日常を日常に」をスローガンに掲げています。日本の伝統文化を未来に繋ぐ。伝統衣装を形として残すだけではなく、伝統衣装着物を誰でもが当たり前に着ることができる日本人教育(日本人力向上)を目指しています。

アクティブフリル浴衣プロジェクトは、その道のりの小さな第一歩の取り組みです。

洋服に慣れた現代生活で「明日から着物を自分で着なさい！」と言うのは「いきなりエベレストに登れ！」というほど無茶な事だと思います。仕事や趣味で着物を嗜む方もいらっしゃいますが、日常に当たり前に着物を着ていた 70 代を境に、日本人女性の 90%は自分で着物が着られないという統計が出ています。それほどまでに着物は日常生活から縁遠いものになっています。

着物を「非日常から日常に」というと、「そんなの無理だよ。」という答えが即座に返ってきます。着物を着てもらおうという取り組みは様々ありますが、イベントや、ごく一部の着物好きの方々を対象にした取り組みの範疇を超えることはありません。日本が江戸時代にタイムスリップするようなことは起きないのです。全くもって現実にはあり得ない、リアリティーにかける話なのです。

現代人と着物の関係は、特別な日に着物は誰かに着付けてもらうもの。「冠婚葬祭や成人の日など特別な日には、着物は専門家に着つけてもらうから自分で着られなくても困らない。」「昔は着ていたけれど今は洋服ばかり。」「もう自分が着ることはないと思う。」「着ないから一枚も持っていません。」「誰もいらないというのでもう処分しました。」

誰にも見向きもされない着物たちは、ただタンスの中で朽ち果ててゆく運命なのでしょうか？着物としてこの世に生み出された使命を全うできずに捨てられてゆくのでしょうか？着物のリサイクル市場にはタンスの中から放出された着物たちであふれかえっています。それらは、すべて過去に誰かのために仕立てられたものです。何十年か経ってそれらが朽ち果てた時。今のように着物が身近に存在しているでしょうか？そんな疑念が頭を過ります。岡山でも作州絣や、烏城紬の保存会が活動しています。

失われてからではなく、いま守らなければならない大切な伝統産業や文化が沢山あります。

　守るためには、私たち一人一人が、それぞれの地域に受け継がれてきた伝統産業の担い手になることが大切だと思います。伝統産業の担い手と言っても、作り手だけではありません。使うことはもっと大切です。「作る・使う」お互いがあってこそ伝統文化は息づきながら未来に受け継がれてゆきます。

幸いなことに、着物はまだタンスの中に、市場に残っています。手を伸ばせばそこにあります。

触れて着ることができます。古いものでも明治、大正時代のものはまだ着られる可能性があります。

しかし、着物は糸で、布なので、ゴールド（金）のように保たれるわけではありません。箪笥にしまっているだけで、カビがきたり、変色したり、経年劣化で朽ち果ててゆきます。

先日、リサイクルショップの店先で、白髪頭の老齢の男性が、店員さんに着物の買い取り相談をしている場面に出会いました。

「タンスの中に着物や帯が沢山あって、女房が着ないから売りたいと言う。ここで買い取ってもらえるらしいと知人に聞いてきたが…。」すかさず小太りの中年の女性が、困ったような顔をして、「持ち込んでもらっても、ほとんど買い取りはできませんよ。持ち帰っていただくものがほとんどだと思います。」

男性は「そうですか…」私は何とも言えずやるせない思いを抱きながら、引き返す男性の後ろ姿を見送りました。本当は、「その着物、私に引き取らせてください。活かせるかもしれません。」そう声をかけたかった。その時の思いが、**着物の終活相談**という形で、処分される着物と処分する人の心を救うことが

できるかもしれない。お嫁に出す娘を思う気持ちで、手元を離れた着物が、大切に活かされ、地域社会の役に立つものになるサポートこそが、私のソーシャルビジネスの基礎になると確信しました。

地域資源を地域財産に

地域資源とはなんですか？　自然、文化財、建物、色々あります。ダイヤモンド、金、農産物、魚、

では、あなたの足元の、石ころ、葉っぱ、木の枝、虫、これらはどうですか？当たり前すぎて、だれも見向きもしないような物に気が付いて、資源を財産に変えたツワモノ達が沢山います。

「栗の枝 300 円」「これは、500 円」これは、余りにも有名な彩のおばあちゃん社長のお話ですが、事実、田舎の道の駅では捨てるようなものまで売れるのです。すべての物は地球の資源なのです。

でも、もっと大切な資源があります。それはなんでしようか？

人です。人材というとても大切な資源です。人材不足とは、人手が足りないのではなくて、人の力を活かせてないだけの事です。美容学校を卒業するとき先生からいただいた言葉があります。

「じんざい」には４つあります。人材とは、誰かに使われるだけの人。人在とは、そこにいるだけの人。人罪とは、いるだけで害になる人。最後の人財とは、大切にされ尊ばれる人。昔の記憶なので一言一句ま

で正確ではありませんが、昨日聞いた事のようにその場面が鮮明に思い出されます。30 年余りの美容師生活で常に人財であることを目指して努力してきました。技術の習得、コンクールを通じての研鑽、後進の育成、社会貢献活動。ところが、夢だと追い求めていたものを手にしても、結果を出しても、そのどれもがむなしく思えて、いつしか心がヒリヒリする焦燥感に苛まれるようになり、築き上げたものも、故郷も、友人も、親までも全て捨てて岡山に来ました。

全てと引き換えにしたものは、体の中に宿った小さな命。主人という新しい家族が一人。それからの私は、ただの人在として向かう道も夢もなくただふわふわと地に足がつかないままにここまで来たような気がします。目先の子育てに逃げ込んで、自分から目をそらし、自分にも、周りにも言い訳ばかりをしてこの 10 年間を過ごしてきました。生きている実感は、子供の成長する姿が目の前にあることだけでした。家族の献身的な愛がなければ私はきっと生きていなかったと思います。

生きがいに気づく。娘と主人の日々成長してゆく様を眺めながら、このままでは終われない。13 歳にして私の身長を越した娘を見るにつけ、私は何をしていたのだろう、人生に胡坐をかいて無為に過ごした日々を後悔し始めたのは、人生の折り返し地点を過ぎてからです。いつもそばで見守ってくれる娘と主人に情

けない姿ばかり見せたくない。このままでは終われない！焦りの中で小さな声が上がった。私の声だ。やっと聞き取れるほどのか細い声を、何とか絞り出したとき再び世界に彩が戻ってきた。

その言葉を主人が拾い上げてくれた。

三人四脚。私たち家族はこんな感じだと思う。自分で決めたこと、自分で選んだ人生、自分で選んだ家族。

全てを愛おしく思う。干からびていた心に水がしみわたるように満たされ、それを呼び水に愛が泉から溢れ出す。「あああああ…私はなんてひねくれていたのだろう…。」そうして私はリアルな世界に甦った。

気づかなければ、多くの着物たちと同じように、箪笥の中でじっと出番を待ちながら、やがて諦めて朽ち果ててゆく人生に甘んじるところだった。

私の人生と着物がピタリと重なった。その瞬間止まっていた時間が動き出した。

「見つかったかい？自分の中にある宝物。」

自分でも気付いていないあなたの中に眠っている宝物に気づく

地域資源の一番大切なものは人。これが生かされていないだけだよね。9月10日の朝の会話だ。

「モノでもカネでもなく人が一番大切にされるべき資源だと思う。」主人の言葉にやっと素直に頷けた。

私は着物（モノ）ばかりに気を取られて本質を見失っている？

「まず、地域資源、つまりいらない着物を集めて、それを使って町おこしや、教育活動に使って地域財産として生かす…」自信満々に喋りだして数秒後、そばで聞いていた主人からダメ出し。

「Stop！地域資源を地域財産に変えてどうするの？それでどうなるの？お金に変えてそれで終わりなの？それって略奪行為と同じだよ。そんなビジネス続かないね。」（ぐうの音も出ない）すぐに言葉に詰まる。

「それじゃあ人はついて来ないね。何で汗水たらしてあなたを儲けさせなきゃいけないの。違うでしょ！」

振出しに戻る。主人と私の会話はいつもこんな感じでループする。（ループしてヘトヘトになるのは私だけだが…。）食い下がって考える、書く、考える…。途中で諦めない。書いて書きまくって今日も日が暮れる。頭の中垂れ流し。流石に恥ずかしいが、そうも言っていられない。崖っぷちなのだ。辛抱強い主人は、手を変え品を変え、言葉を紡ぎだしては忍耐の一字で私に付き合ってくれる。かれこれ20年になる。

「何度も同じことを言うけど、手段に走っちゃダメ。例えば、『北海道に行く！』と決める、これが目的。歩く、飛行機、汽車で行くのに切符を買う。これが手段。あなたは手段ばかりを考えて、目的地が定まってい

ない。」

「それならわかる。なのに、自分のビジネスに置き換えると、わからん…ますますわからん…目的地、どこだろう、私はどこに行きたいのだろう？五里霧中の中をさまようようだ。ますます不安だ。」

「わかったような気になって、すぐに答えを出そうとしなくていいから、じっくり考えなさい。答えは自分が持っていると信じて。その覚悟がないなら、起業なんてしなくていい。」

何のために着物を集めるのか？アクティブフリル浴衣を作るのか？今していることは何のため？どこに繋がる？私をどこへ連れて行くの？　　悶々時間…　書き書き…

先日のセミナーでペルソナ手法を習った。多分さわりの部分だけなのだろう。サンプルペルソナ（理想的な架空の人間）顧客を創り、その人が 100 パーセント満足するだろうサービスを考え、インタラクションシナリオシートに、起承転結のストーリーを書き込むという内容だ。事業計画書は 1 行も進まないが、ペルソナの人物像は完璧だ。モデルは母、タイムリーに入院中。物語の主人公に肉付けをするように、趣味、正確、好みなど細かく書き込んでゆく。理想のペルソナが出来上がってゆく。シナリオも書けた。

冷静になって、はたと気が付いた事がある。（これでどんなビジネスになるのだろう？誰か教えて～）いまだ

何もわかっていない私を発見！もしかして、落ちこぼれかもしれない…。あぁ…自己嫌悪。

夏休みにおばあちゃんと一緒に小さくなった浴衣を

アクティブフリル浴衣に直してお祭りに行きました。